

視聴覚資料と図書館

—中京大学附属図書館（本館）

に於ける視聴覚資料について—

羽 根 寿 子

1. はじめに

昨今の図書館に於ける視聴覚資料の普及には、めざましいものがある。それは、最近の文字離れにも一因があるだろうが、目にうったえるもの耳にうったえるものの力は、今も昔も変わりはないはずである。

当館も、例外でなく、ビデオテープ、カセットテープ、マイクロフィルム、そして最近ではレーザーディスクなども購入されるようになった。

この現象に伴い、当然のごとく、機器の設置、視聴覚室の設備、資料の保管場所、目録といったものを、完備していかなければならない。いずれも、図書資料の場合と異なるため、また図書資料に比べ視聴覚資料は歴史が浅いので、暗中模索のうちに、どうにかこうにか利用者への提供にまでこぎつけている館が、少なくないのではないか。

将来、図書のほとんどが視聴覚資料（非図書資料というべきか）にとって変わることが予想されるので、今この時期に、視聴覚資料に関する、目録の整備と機器及び施設の充実を図らなければならないのではないか。

以下、視聴覚資料をとりまく様々な問題について、当館（本館のみ）の現状を紹介しながら、考えていきたい。

何分にも、未熟なため、現状紹介だけで終わることになってしまうのではないかと、危ぶまれるが、その点ご了承いただきたい。また、取り扱う資料は、録音資料、映像資料、マイクロ資料と、させていただいた。

2. 資料の種類及び機器類

当館での視聴覚資料（ここで取りあげる）の種類、及び保管数は、表 1 に示すとおりである。

表 1 視聴覚資料種類及び保管数 （1986年12月調べ）

カセットテープ	1,235巻	マイクロ フィルム	2,531巻	ビデオテープ	122巻
オープンテープ	327巻	マイクロ フィッシュ	23,739巻	スライド	1,421枚
レコード	610枚	16mmフィルム	44巻	レーザーディスク	12枚

資料の保管場所は、映像資料と録音資料は同じ部屋（特に名称はないが、現在は視聴覚資料準備室と呼んでいる。）に保管し、マイクロ資料のみ、書庫の一郭に保存されている。

資料があれば、当然機器類が必要である。当館では、閲覧用個別ブースがベータ用 3 席（カセットテープも使える）、VHS用 5 席、レーザーディスク用 1 席、と、数は少ないが、視聴覚室（視聴覚資料準備室と同じく、便宜上こう呼んでいる。）に設置してある。その他に、8mmと16mm映写機、スライド映写機もあり、マイクロリーダープリンターは、マイクロ資料と同じ場所に備えてある。

3. 資料の収集と収集状況

資料はほとんどが、各学部から学部予算で購入される。そのため、研究の手助けになる内容のことが多い。それに対し、図書館が購入する資料は、映画や音楽というように、教養ないしは娯楽性の高いものが多い。

おおよその、分野別所蔵資料の件数は、表 2 に示すとおりである。

表2 視聴覚資料分野別件数

資料名 分野	和 漢			洋		
	映 像	録 音	マイクロ	映 像	録 音	マイクロ
総 記			2			1
心 理	4					
歴 史 地 理	2	2	2		2	2
社 会 科 学	8	2	7	3	1	11
自 然 科 学	1	1		27	1	
工 学	9			4	1	3
産 業		3	1			1
芸 術	8	48		19	2	
語 学		131		4	58	
文 学		28	8		33	2

4. 資料の登録

1985年3月以前、登録台帳は、本館・分館それぞれが別個に保存し、図書資料と視聴覚資料を分けて登録していたが、1985年4月のUTLAS導入に伴い、登録番号を、本館・分館及び、資料の形態をも区別せず一本化し、同じ台帳が使われるようになった。

台帳上での区別は、V (Visual) ・ A (Audio) ・ M (Micro forms) の記号が、備考欄に付記されるか否かで行われている(表3参照)。つまり、この段階で、視聴覚資料として取り扱うかどうか、決まるのである。換言すれば、整理方法が決まり、排架場所が決まるのである。

表3 視聴覚資料の台帳及び請求記号に付される記号の説明

A	録音物 (Sound recordings) [Audio] 音盤 (レコード)、録音カートリッジ、録音カセット、 録音テープ (オープンリール)
V	映像資料 (Motion pictures and videorecordings、 Graphic materials) [Visual] 映画フィルム、ビデオ録画、美術原画、版画、美術 複製画、フィルムストリップ及びフィルムスリップ、 フラッシュカード、フリップチャート、写真、絵画、 絵はがき、ポスター、放射線写真、スライド、設計 図表類、トランスペアレンシー、掛図。
M	マイクロ資料 (Microforms) マイクロフィルム、マイクロフィッシュ、 ロールフィルム。

ここでの問題としては、図書と非図書（つまり視聴覚資料）がセットになった資料をどう扱うかということがある。（この問題は、当館〔筆者〕だけがかかえていたものではなかったことは、今では明らかとなっている。）

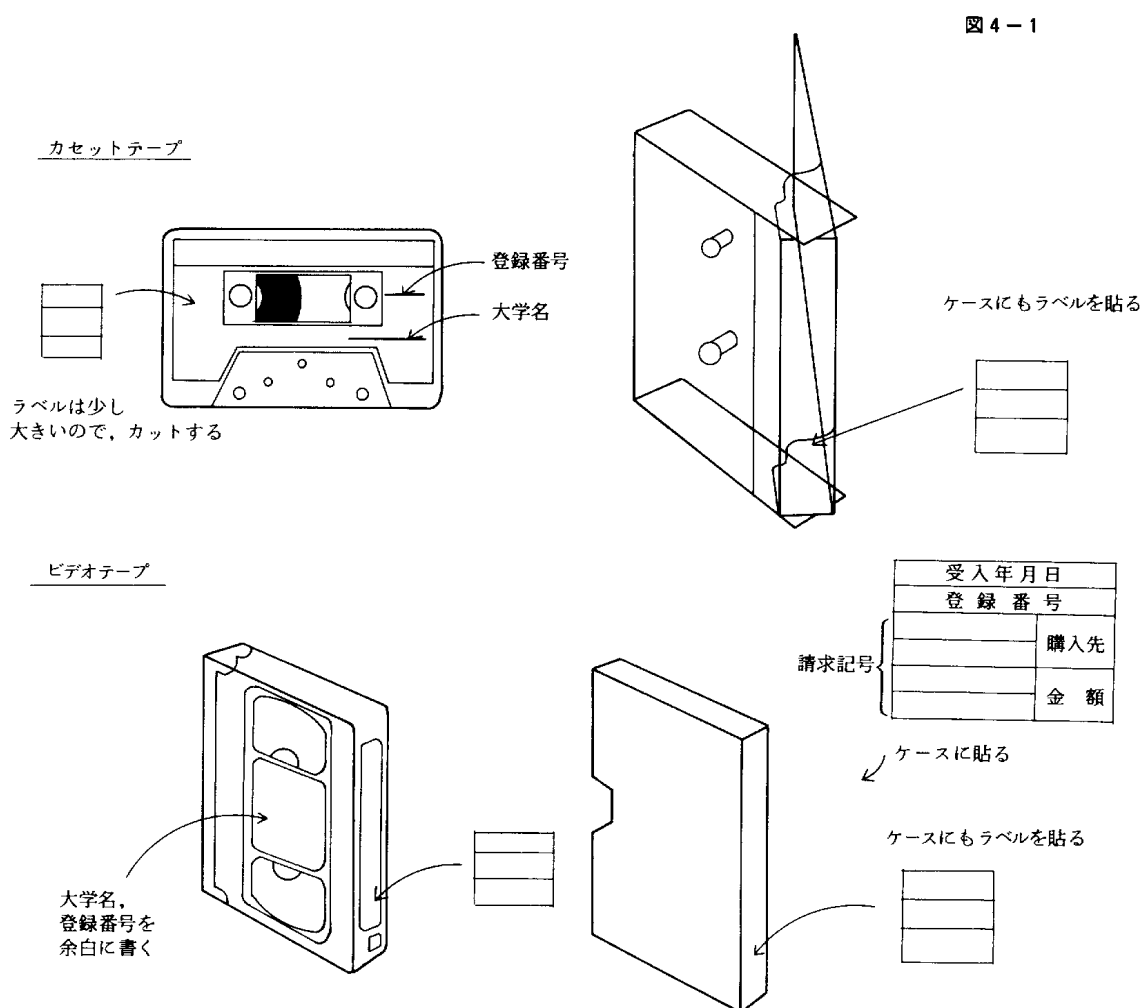
ある館から、大変参考になるご意見をうかがったので、ここにあげさせていただく。利用するとき、視聴覚資料なしではその図書が何の意味もなさない、使えない場合は、視聴覚資料として扱い、逆に、視聴覚資料がなくても、十分に図書のみで利用できるものについては、図書資料として扱うということであるらしい。この方法によることで、起り得る問題点は別として、一つの理想が生まれてくる。それは、受入れから整理以降が、全て同一部門で行われることである。整理するもの、閲覧に携る者が受入れ業務からできれば、より一増のサービス向上になるのではないか。なぜなら、図書と非図書がセットとなった資料の、お互いの関わりは、整理してみて初めてわかることが、多いと思われるからである。

理想はさておき、実状であるが、一応当館では、ソノシートが一枚、本に挟まれているような場合を除き、図書を付属資料として扱うこととなっている。したがって、台帳上で、A・V・Mいずれかの記号が付くのである。

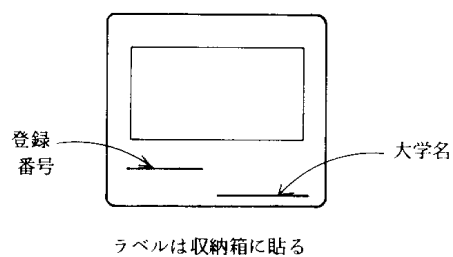
これは、受入れが事務的にスピーディーに行われることのみを考慮してではない。視聴覚資料を、図書の書架に並べることを避けるためでもある。セットになっているものを、離して排架することによって起る効率の悪さを考えると、自ずと前に述べたようになる。もちろん、それぞれ資料に代本板等をつけることも考えられたが、スペース等の問題から、この方法は使われていない。

この章の最後に、登録番号の記される位置、方法について述べることにする。図書と違い、形がそれぞれ資料の種類によって様々、材質も違うということで、図4のように処理している。また、この章は、受入れ段階についての章であるが、作業としては、登録番号を記すこととあまり変わらないので、ラベルの位置も示しておく。

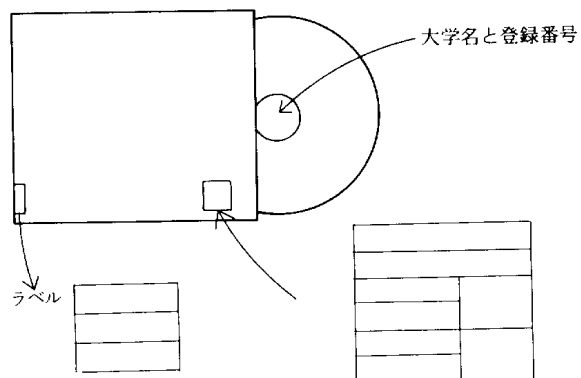
図1 資料別に見た、登録番号及びラベルの位置



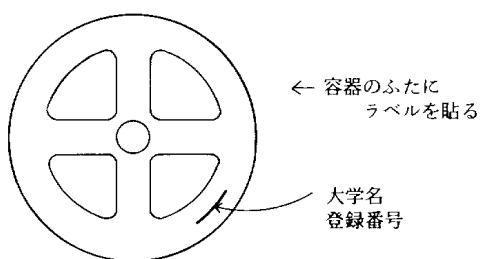
スライド



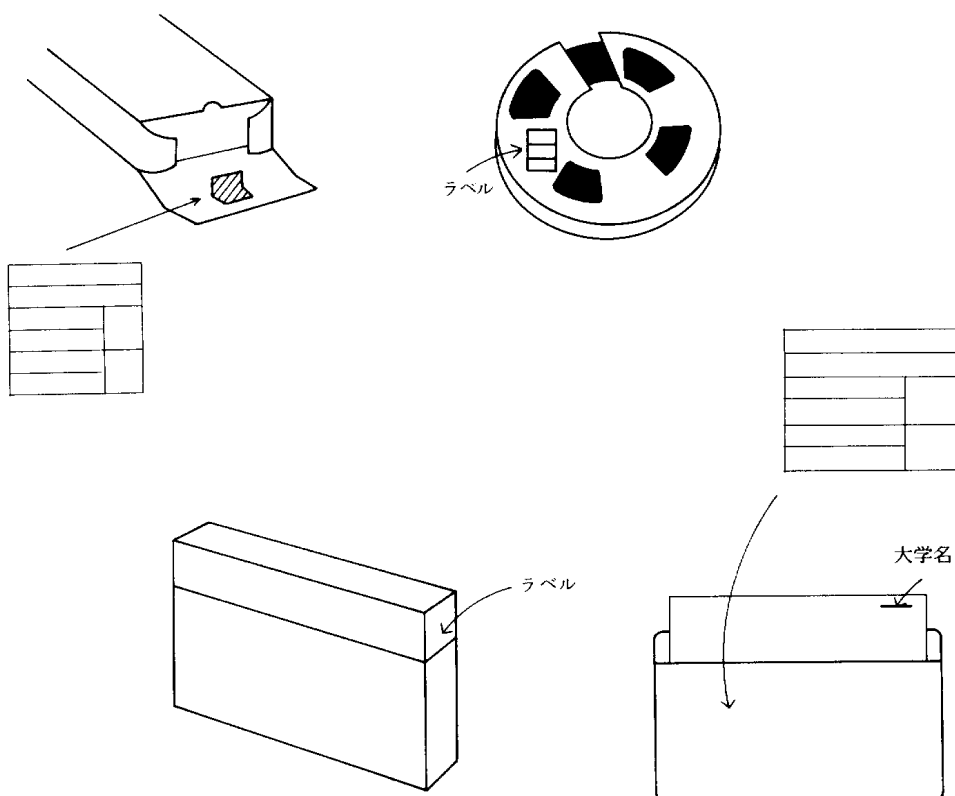
レコード、レーザーディスク



16mm, 8mm



マイクロフィルム



5. 整理について

いよいよ目録作業である。これについては、まだまだ検討の余地が残されている。和漢のものは、筆者がほとんど独断と偏見で整理しているので、恥を晒すようで忍びないが、おおよそが、図2に表わしたものである。

図2 視聴覚資料目録例（分類—NDC 目録—(和)NCR,(洋)AACR）

- | | | |
|--------------|------------|------------|
| ① 資料種類記号 | ② ロケーション | ③ 登録番号 |
| ④ 標 題 | ⑤ 資料種別表示 | ⑥ 副標題, 巻次 |
| ⑦ 著作者表示 | ⑧ 発行に関する事項 | ⑨ 形態に関する事項 |
| ⑩ シリーズに関する事項 | ⑪ 注記に関する事項 | |

和

レコード

① A	
768.4	④ 能 ⑤〔録音資料〕 ⑥ 第18回芸術祭参加世阿弥
N 91	生誕六百年記念 上 五流・五番
1	⑧ 東京 ビクター音楽産業 1963（発売）
	⑨ ディスク3枚（147分） 33⅓rpm ステレ
② MAIN	オ 31cm+解説書（60p）
	⑪ 横道萬里雄監修・解説
	内容：高砂，頼政，井筒
	1.No
③ 3729	
（1～4）	○

カセットテープ

① A

850.3

Te 12

② MAIN

③ 523156

(1~2)

④ テーブル式基礎フランス語便覧 ⑤ [録音資料]

⑧ 東京 評論社 1983

⑨ カセット1巻(60分) + テキスト(200P
22cm) 小林正著

⑪ D.ショーヴァン吹込

ISBN 4-566-05700-3

1.Teburushiki kiso Furansugo benran

2.Kiso Furansugo benran



ビデオテープ

① V

532.4

F 92

1

② MAIN

③ 539969

④ フライス盤作業 ⑤ [映像資料] ⑥ 第1巻

⑧ 東京 日刊工業新聞社 [19--]

⑨ ビデオカセット1巻(30分) VHS 白黒
13mm ⑩ (機械加工シリーズ)

1.Furaisuban sagyo



16mm

① V

319.8

Ko 21

④ 予言 ⑤〔映像資料〕⑦ 子どもたちに世界に！被爆
の記録を贈る会映画製作委員会企画・製作

⑧ 東京 子どもたちに世界に！被爆の記録を贈る会
〔19—〕

② MAIN

⑨ 映画リール1巻(40分) 光学録音 カラー

16mm ⑩(原爆記録映画三部作・第2作)

⑪ 羽仁進監督・脚本 鈴木瑞穂, 大平透ナレーター

1.Yogen al.Kodomotachi ni Sekai ni

Hibaku no Kiroku o Okurukai

③ 204836



スライド

① V

509.5

N 77

④ JPC訓練スライド ⑤〔映像資料〕⑥ 配分問題
とは何か LP入門 ⑦ 日本生産性本部製作

⑧ 東京 日本生産性本部 〔19—〕

⑨ スライド86枚(26分) カラー +カセット

② MAIN

1巻, 解説書(2冊) ⑩(経営科学シリー
ズ)

1.JPC kunren suraido 2.Haibun mondai

towa nanika 3.Keieie kagaku shirizu


③ 3736

(1~89)


al.Nippon Seisansei Honbu



レーザーディスク


① V	
778.237	④ 自転車泥棒 ⑤ [映像資料]
J 55	⑧ [東京] レーザーディスク (製作・発売) c 1984
② MAIN	⑨ ビデオディスク 1 枚 (88分) CLV 白黒 30cm
	{ 原標題 : Ladri di biciclette. ⑪ ヴィットリオ・デ・シーカ監督 ルイジ・バルト リーニ原作 ランベルト・マジョラーニ [ほか] キャスト 日本語字幕
③ 547102	1.Jitensha  dorobo

マイクロフィルム


① M	
338.08	④ 銀行総覧 ⑤ [マイクロ資料] ⑥ 1 ⑦ 大蔵省編
G 46	⑧ 東京 雄松堂フィルム出版 [19--]
1	⑨ マイクロフィルムリール 1 巻 9.2cm 35mm
	⑪ 1 第 1 ~ 6 回
② MICR	
	1.Ginko soran al.Okurasho
③ 538931	

洋

レコード

<p>① A 932 Sh 12 1</p>	<p>⑦ Shakespeare, William. ④ Henry IV, ⑥ pt. 1. ⑤ [Phonodisc] ⑧ London, Argo ZPR 149-152, 1960. ⑨ 4 discs. 33$\frac{1}{3}$rpm. stereo. ⑩ (Works of Shakespeare)</p>
<p>② MAIN</p>	<p>⑪ { Directed by George Rylands. Complete and uncut in the text of The new Shakespeare, ed. by John Dover Wilson. Cambridge [Eng.] University Press, 1968. xviii, 210 p. 21cm. Paperback ed.</p>
<p>③ 1820 (1-5)</p>	<p>1. Wilson, John Dover, ed. 2. Title. 3. Title: The  new Shakespeare. (Series)</p>

カセットテープ

<p>① A 857 E 22</p>	<p>⑦ The Editorial staff of Berlitz. ④ Berlitz comprehensive French. ⑤ [Phonotape] ⑧ Tokyo, Nippon Gogakukyoikukyokai [1967, c 1956]</p>
<p>② MAIN</p>	<p>⑨ 6 reels. cassette. appendix. ⑩ Appendix: Rotary verb finder.</p>
<p>tape no. ③ 1801-(1-6)</p>	<p>"Berlitz comprehensive French, part 1-5." by The editorial staff of Berlitz.</p>
<p>book no. ③ 1801-(7-13)</p>	<p>"new Berlitz key program, French," by the editorial staff of Berlitz. 1. Title. </p>

ビデオカセット

- ① V
778.253
C 85
- ② MAIN
- ③ 520671
- ④ Coming home. ⑤ [Motion picture] ⑧ Farmington Hill, MI., Magnetic Video, c 1981; made 1978.
⑨ 127 min. col. Beta.
⑪ Starring by Jane Fond, Jon Voight [and] Bruce Dern.
Story by Nancy Dowd.



マイクロフィルム

- ① M
319.8
N 99
1-18
- ② MICR
- ③ 3621-
3638
- ④ Nuclear weapons, arms control, and the threat of the mononuclear war; special studies: 1969-1981. ⑤ [Microfilm]
⑧ Frederick, MD, University Publications of America, c 1982.
⑨ 17 reels. 35mm.
⑪ { Appendix: A guide to Nuclear weapons, arms control, and the threat of thermonuclear war: special studies: 1969-1981. Comp- by Robert Lester. Ed. by Paul Kesaris.
ISBN 0-89093-494-0
1. Lester, Robert, comp.
2. Kesaris, Paul, ed.

目録作業については、まだまだ試行錯誤をしている館が多いようだ。しかも、その館独自の方法で作成している所も少なくない。また、カード目録の所、冊子体目録の所と様々である。

当館の分類番号について述べると、簡略化せず、図書と同じように、ある程度まで細区分している。出納室には、書名、著者名、分類カードとあるが、視聴覚資料の目録カードも全て混配してある。利用者にとって、分類番号の上の記号（A・V・M）で区別しなければならない点に、難があらうかと思われるが、録音テープ（等）が付いた資料と知らずに求めてくる利用者にも応じられる利点がある。

利用者のことはさておき、目録の記述について考えていただきたい。

はいってくる資料の数が少ないため、和洋図書整理課に一人ずつ兼任者がいるわけだが、視聴覚資料は、それを見る（聴く）ための機械を利用しなければならず、本のようにぺらぺらとページをめくって内容を把握するわけにはいかないので、結構時間を費すこともある。

中でも視聴時間が、やっかいものである。その点でマイクロ資料は助かる。ほんの目安程度で良いとは思いますが、それさえ記されていないものが、少なくない。特に、テキストの中の数頁の部分しか収録されていないテープなどには、閉口する。もちろん、そういう場合は、実際視聴してみるのだが、いくら数少ない資料とはいえ、時間が借まれるのは同じだ。

こういう時に欠かすことができないのが、数々のパンフレットだ。録画・録音カセットを専門に製造発売する会社からや、NHKなどから発行されている資料ならば、しめたものだ。困るのが、本の出版社で、ほんの付録にカセットを、しかも別売したという場合だ。

最近では、ビデオデッキなどに、テープの録画時間を表示するものも出回っているが、カセットテープなどにもこういった機能のものが、あればいいと思う。

次にあげたいのが、著作者の問題だ。「NCR新版予備版」では、「著作者表示は、その資料の内容に責任のある著作者（個人または団体）に……………」

となっている。また、黒岩高明著「視聴覚資料組織法」には、「……画面には登場しないし、また責任者表示にも記載されなかったが、その作品の芸術的ないしは技術的製作に関係した人びとは「スタッフ」の見出しのあとに記載する。スタッフとして貢献する人には次のような役割があり、必要に応じて随意にリストすればよい。製作者・監督・物語、台本、ナレーションの著作者は………」となっている。

これだけ明確に指示されていて、何を悩むのか、と言われるかもしれないが、資料によって、製作者を著作者の位置に記載したり、映画などの製作スタッフを全て注記の位置に記載してみたりしているのが、正直なところである。

なぜこのようなことになってしまうのか。ビデオテープならそのビデオテープを製作した個人なり団体名なりが、掲げられている場合は、すんなりとその製作者を著作者の位置に記載するのだが、特に映画などのような、スタッフの多い資料になると、製作者や監督のみを標目とせず、それらを含めたスタッフたちをまとめて注記に記載してしまっている。その理由は、特に映画を収集している、フィルムライブラリーのような館ならいざ知らず、大学図書館では、監督を標目においても、意味がないのではということである。

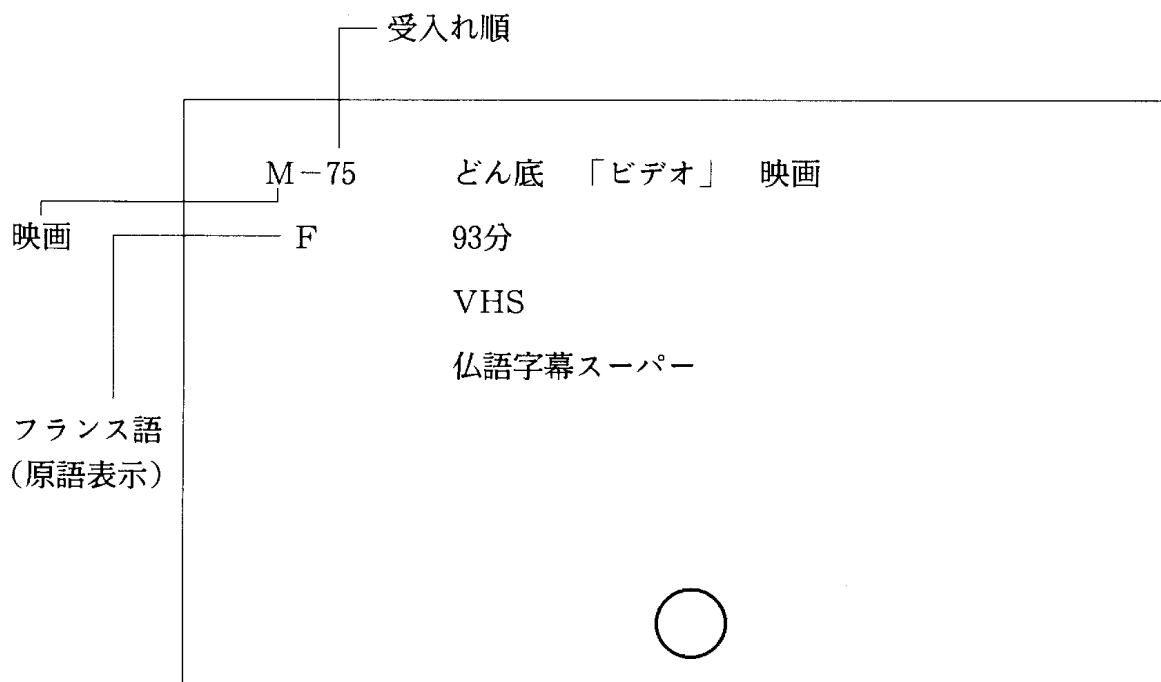
先程述べたように、これらの基準は、全て筆者の考えである。しかし、図書資料と違い、視聴覚資料は、標題（タイトル）のみからだけでも検索できれば、それで充分ではないだろうか。しかしながら、くどいようだが、あくまでも個人の意見でしかないので、目録を作成するたびに、著作者でつまづくことが多いのである。

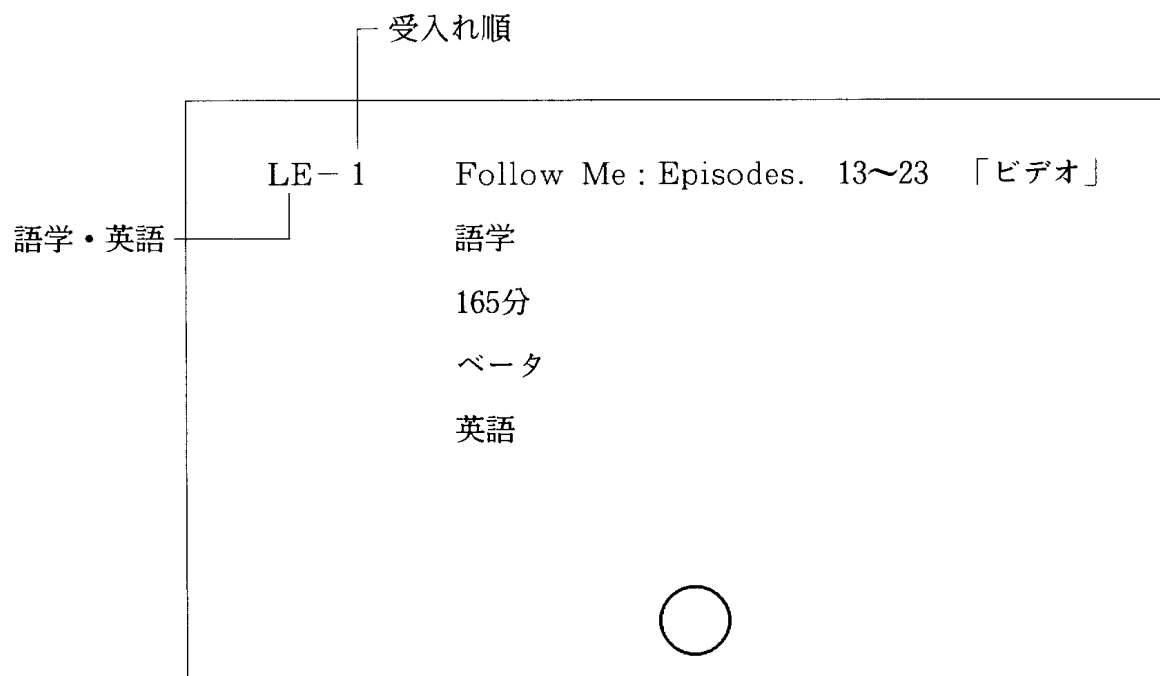
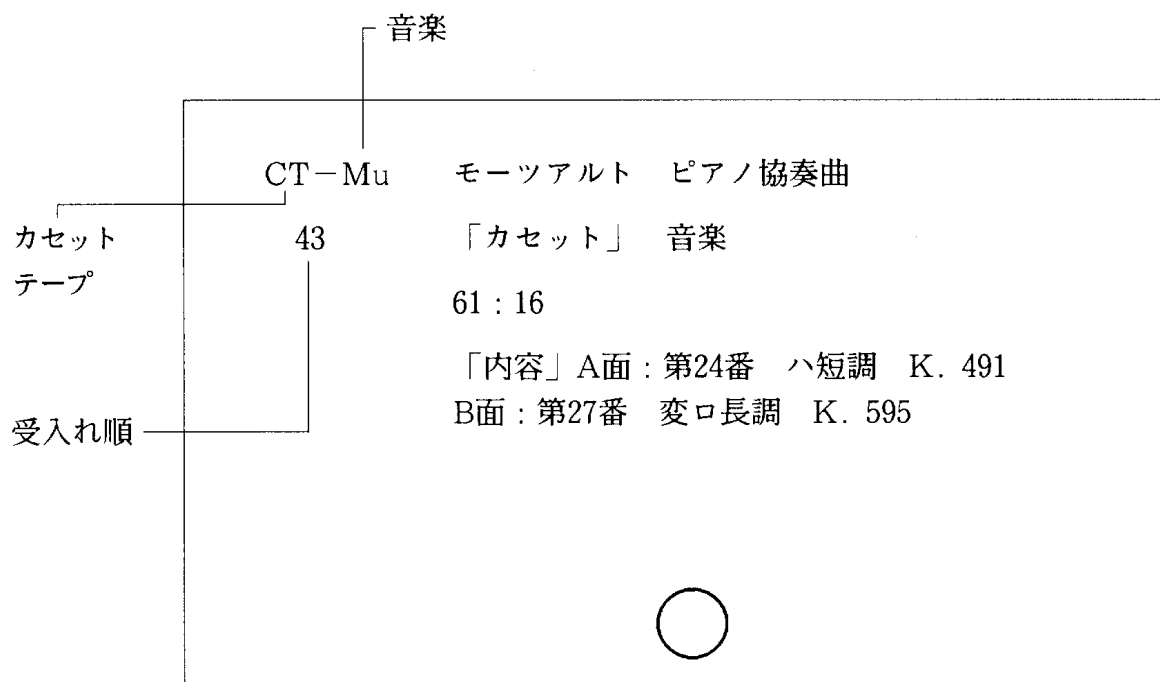
次にとりあげるのは、資料の登録の章で触れた図書資料と視聴覚資料がセットになったものの目録である。例をあげてみると、ここに「やさしい英会話読本」などと称する、テキスト（図書資料）と録音テープ（視聴覚資料）がセットになったものがあるとする。テキストの方の頁数はかなりのもので、テープと言え、30分程のものが一巻。当然、テープの内容は、微々たるものである。テープなしでも、充分使えるのである。このような資料の目録に「+テキスト」と記載するのには、かなりの抵抗を感じる。しかし、利用者のためを考えて、

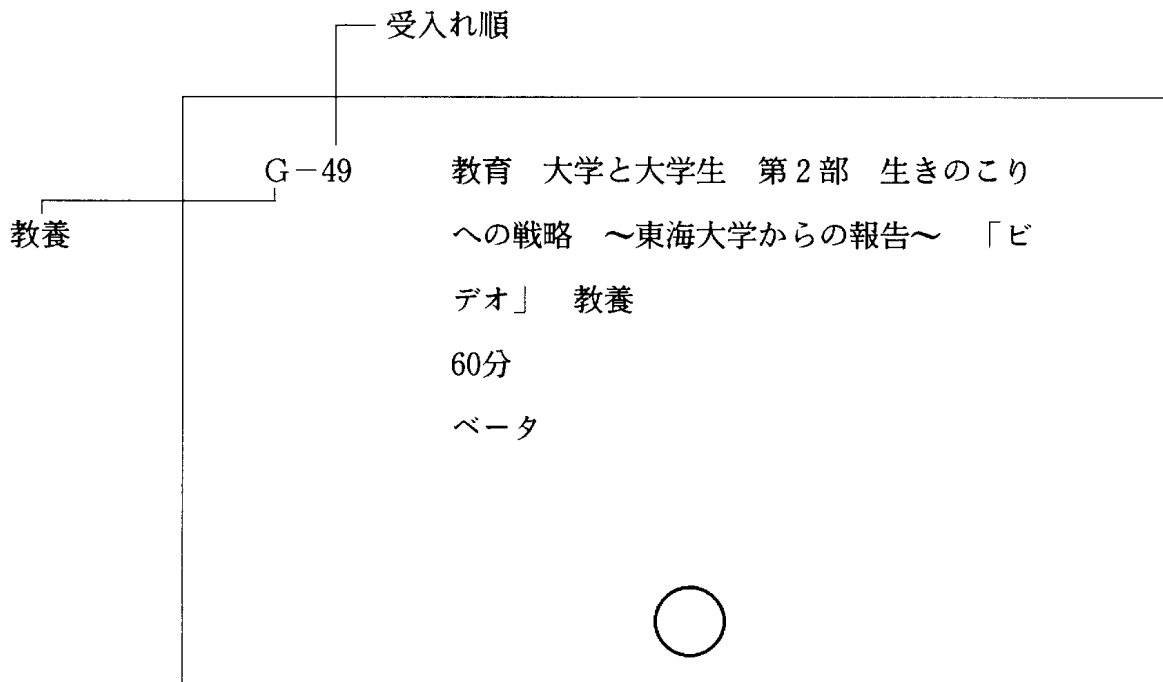
テキストの書名、著者を副出すれば、目録上いかなるようになっていても、差し支えないわけだ。この方法は、あまりまだ実行していないが、これからは行うべきことかもしれない。

その他、録音資料では「トラック数」・「チャンネル数」など、映像資料では「テープの幅」など、現物に行きあたるために、あまり必要でもないような項目があるが、一つの基準というものは大切なので、疑問を持ちつつも、従っている次第である。このことの反動かどうかかわからないが、図3のような目録も、当館では使用している。

図3 ダビングによる資料の目録







これは、生テープに録画・録音した資料の目録である。この目録を出したところで、これらの資料について、また利用状況について、触れてみよう。

6. 視聴覚資料室の利用状況

1983年頃から、生テープを使って、利用者（主に学生）に、語学勉強と教養を高めることを前提として、資料を提供してきた。このことには、著作権の問題が当然のごとくからんでくるのだが、今回は勉強不足のことでもあるし、なかなか難しい問題であるので、この件については、またの機会とさせていただく。

当初は、語学の力をつけるということで、洋画のエアチェックをしたものを、集めてみた。もちろん、原語あるいは字幕スーパー付きのもののみであった。その他、NHK第二放送の英会話番組等も録画してみたが、あまり利用がなく、映画に人気が集中したので、やがて消去していった。

教養的なものとしては、スポーツから歴史もの、果てはニューメディアについての番組なども録画した。映画の利用数には程遠いが、これらもなかなかの

人気がある。

最初は、図3に示したような目録は作らず、新しく資料となったもののタイトルを掲示するに留めていた。また、それで十分な程、数少ない資料だったのである。そのうち利用者が増えるにつれ、資料も増えてきたので、別にカードケースを設け、検索に備えたのである。今では映画125、教養93、語学8、音楽3という数である。

視聴覚資料室の利用頻度については、表4に示す通りである。

表4 視聴覚室及び資料統計

年度	利用 者 数		利 用 本 数		利 用 時 間 _(分)		開館 日数
	計	一 平 日 均	計	一 平 日 均	計	一 平 日 均	
58	81	0.5	71	0.5	4700	33	140
59	414	1.5	372	1.3	27025	98	273
60	658	2.4	529	1.9	19934	73	272
61	1,187	6.2	939	4.9	100820	533	189

利用者別統計

	58年度	59年度	60年度	61年度
種 別	利用者数	利用者数	利用者数	利用者数
文	35	155	282	415
法	15	84	211	338
商	24	162	198	386
院		1		3
教職員	7	10		
その他		2	2	10

分野別統計

58年度		利用者数		利用本数	
分野	テープ 種類	ビデオ テープ	カセット テープ	ビデオ テープ	カセット テープ
映 画		51		54	
教 養		14		14	
語 学		3		3	
音 楽					
持 参		13			

59年度		利用者数		利用本数	
分野	テープ 種類	ビデオ テープ	カセット テープ	ビデオ テープ	カセット テープ
映 画		343		346	
教 養		14		14	
語 学		1	4	1	4
音 楽		1		3	
持 参		47	4		

60年度		利 用 者 数			利 用 本 数		
分野	テープ 種類	ビデオ テープ	カセット テープ	オープン テープ	ビデオ テープ	カセット テープ	オープン テープ
映 画		447			447		
教 養		53	4		53	4	
語 学		19			19		
音 楽		2	4		2	4	
持 参		104	24	1			

61年度		利 用 者 数			利 用 本 数		
分野	テープ 種類	ビデオ テープ	カセット テープ	レーザー ディスク	ビデオ テープ	カセット テープ	レーザー ディスク
映 画		888			888		
教 養		40			40		
語 学		5			5		
音 楽		1	2		1	2	
持 参		220	2	3			

表4について、説明をさせていただくと、この視聴覚資料室を開放し始めたのが、1983年10月からであるので、58年度の開館日数が、数字のようになるわけである。また、61年度は、なるべく最近まで示したかったのだが、11月までの数字が出してある。尚、利用者数、本数の一日平均は、小数点以下一ケタまでとした。利用者別統計のところで、「その他」となっているのは、聴講生・研究生・豊田分館学生のことである。そして、利用本数が、利用者数より少ないのは、資料持参者の本数が入れてないためである。さらに、利用者数の計と、利用者別統計・分野別統計それぞれの利用者数をたしたもののとの差があるのは、貸出中資料が、利用者数の計にはいっているためである。

数字の変化を見ていただければおわかりのように、利用頻度は高まっている。映画の利用が圧倒的であるが、先に述べたように、語学性を重視しているので、娯楽を求めた結果というだけで、かたづけてはいけないように思う。

次に、閲覧・貸出についてであるが、学生については、マスターテープの貸出は、行なっておらず、ダビングしたテープによる資料のみである。

マスターテープの閲覧のための請求カードと、ダビングテープ資料の貸出のための請求カードは、一般の図書資料と同じで、方法も同じであるので、あえて触れない。したがって、閲覧についてであるが、図4のような用紙に記入させている。（教職員も同様）

図4の用紙は、資料の閲覧状況を知るためよりも、視聴覚室の利用頻度を把握するためのものである。そのため、厳密に言えば、マスターテープを閲覧する時は、図書と同じ請求カードプラス図4の用紙が必要なのである。混乱を避けるため、ここではダビングテープの閲覧方法を示すこととする。

まず、利用者は、閲覧カウンターに備えられた目録（図3参照）で検索。次に図4の用紙に記入し、学生証（教職員の場合は用紙のみ）を添えて館員に提出する。受けとった館員は、用紙を持って、利用者と共に視聴覚資料準備室（常時施錠）に行き、求められた資料を学生に渡し、学生証と用紙を閲覧カウンターで保管する。学生は、資料を受けとったら、個別ブースのある視聴覚室（施錠していない）で視聴する。

図4 視聴覚室利用請求カード

学部 年		氏 名		利 用 日	年 月 日
利 用 テープ 名	<small>注1：利用するテープの分類番号は備考欄に書いて下さい。 注2：自分で持ってきた資料を利用する場合は、「自」と書いて下さい。</small>			テ ー プ 種 類	VHS ・ ベータ ・ カセット テープ
利 用 時 間	※ 時 分 ～ 時 分				※
備 考： <small>注3：※は記入しないで下さい。</small>					

この視聴覚室が、閲覧カウンターから見えない位置にあることが、一つの難点である。一応、入口に、利用希望者は、閲覧カウンターまで申し出るように掲示はしてあるが、目の届かないことは、管理上問題である。尚、この視聴覚室では、個人持参の資料も視聴できることになっていて、利用方法は、何ら変わらない。

7. 資料の保管と機器整備

最後に、一番大切なことを残したようである。資料の保管については、あまりほめられた状態ではないが、今まで、どうにかトラブルもなく過ぎてきた。保管場所の中は、15℃、50%の恒温恒湿度であることが、望まれるらしいが、なかなか管理がゆきとどかない。テープも定期的にまわしてやる必要があるが、少ないとはいえ、容易に実行できる数ではない。しかし、保管していても、いざ利用となったとき、使いものにならなければ、ごみと同じである。少しずつでも、始めなければならないだろう。そのうえ資料を館外貸出（教職員のみ）している限り、貸出先での保管状態はどうかということをも、考えなければいけない。これは質問を受けて、初めて気づいたことだ。

また、機器のことであるが、これもまた定期検査なるものなど、行っていない。故障したときにだけ、業者に修理をしてもらってはいるが、それではすまないであろう。このたびは、一言も触れなかったが、当大学には、A・Vセンターがある。ここでは、聞くところによると、資料の点検はやはり行っていないが、機器の方は定期検査を頼んでいるらしい。

8. おわりに

思いつくまま、とりとめもないことを、恥を忍びつつ述べてきた。

今まで資料を前にして、あんなに悩んだりしたいろんな問題が、文字で表わしているうちに、だんだん小さなつまらない、なんでもないことのように思えてくる。しかし、また実際の業務にもどると、頭をかかえてしまうのだ。

少しでも、疑問に思ったことは、思いきって述べてみた。どうせなら、色んなことをと思い、少し欲ばり過ぎたかもしれない。これからは、これらの問題を、一つ一つていねいに、解決してゆかなければならないと、考えている。

また、余談ではあるが、視聴覚資料という小さな枠で考えず、もっと大きなところへ目を向けることも忘れてはならないのではないか。図書館が図書館でなくなる日を否定してはならないことを、頭に入れておくべきではないか。これからどんどんと頭をもたげてこようこの図書でない資料を、視聴覚資料と呼ぶか呼ばないかは別として、今までのように、図書中心の考え方では、時代錯誤と言えるのではないだろうか。

最後に、今年度東海地区分科会に参加させていただき、たくさんの貴重な参考になるお話をうかがったので、この場を借りて感謝させていただきたい。

<参考文献>

1. NCR新版予備版 日本図書館協会目録委員会編
2. 視聴覚資料組織法 黒岩高明著
3. フィルム・ビデオ・ライブラリーを考える 荻昌朗 (図書館雑誌 1982. 7)
4. 本協会及び私立大学懇話会加盟大学図書館におけるA・V資料(視聴覚資料)導入の現状について—アンケート—調査分析報告— 森谷 彰

AV (Audio-Visual) materials and Library

—about AV materials in the Library of Chukyo University—